



頭試問に参加した。わたしの親戚一同がかつて住んでいた町や村が点在していた辺りは、現在ではイスラエルの一部（エルサレム、ハイファ、ティベリアス、ナザレ、アッカ）となっており、パレスチナ人たちはイスラエル主権下の少数民族として暮らしている。西岸地区やガザ地区ではパレスチナ人が自治を獲得しているところもあるが、一般的な治安機能はイスラエル軍が掌握しており、国境や検問所や空港などは特に厳重な管理体制が敷かれている。イスラエルの役人にいつも決まって尋ねられたことの一つは、(わたしの合衆国パスポートにはエルサレム生まれと書かれていたので) ここで生まれた後わたしは正確に「いつ」イスラエルを離れたのかということだった。それに対し、自分がパレスチナを離れたのは一九四七年の十二月だと「パレスチナ」という言葉にアクセントを置いてわたしは返答した。「この国に親戚はいるか」というのが次の質問であり、それに対する「一人もいない」という自分の返答は、思いがけない悲しみと喪失感をわたしの中に呼び覚ました。というのは、わたしの一族の者は一九四八年の初春までには一人残らずここから追い出され、以来ずっと異国を流浪しているからである。一九九二年、わたし一家が一九四七年にここを離れて以来はじめて、わたしは西エルサレムにある自分の生家(二族が共同所有していた家)とナザレに

エドワードは背が高く、眼鏡をかけていた。この男じゃない」と首を横に振った。わたしにはすぐ彼がわかった。三十年近くわが家に仕えてきた執事(suitfrags)のアフマド・ハーメドだ。狂信的なまでに正直で忠実なこの皮肉屋は、わたしたちにとっては家族同然だった。わたしは彼に、三十八年もの不在のあいだに加齢と病気で容貌は変わってしまったが、自分は本当にエドワードだよ、と納得させようとした。そして突然わたしたちはひと抱き合い、互いの腕の中で涙を流して再会を喜び、帰らぬ時を嘆いた。彼はわたしを肩に乗せて運んだことや、台所でおしゃべりをしたこと、クリスマスや新年にどんなお祝いをしたかなどについて話しつづけた。アフメドがうちの七人の家族(両親と五人の子供)の一人一人を細かく覚えていただけでなく、わたしのおばやおじやいとこや祖母、さらには家族ぐるみで付き合っていた数人の友人たちまではっきり覚えていてわたしは感激した。そして、遠くアスワン近郊のエドフという町に隠居したこの老人の口から「過去」がほとぼり出てくるのを聞くにつれ、永遠に失われただけでなく、たまに追憶や断片的な会話に登場するほかは基本的に思い出されることのない、わたしたちの歴史やあの時代の特異な状況が、いかにはかない束の間の夢であったかということとをわたしは改めて認識させられた。

ある母の育った家、サファドにあるおじの所有していた家などを訪ねる機会を与えられた。これらの家にはみな新しい住人が住みついており、そのことに対するはつきりとは説明しにくい感情が強烈な抑制作用を及ぼしたため、わたしはふたたびこれらの家屋に足を踏み入れることができず、中をほんの一瞥することすらできなかった。

一九九八年十一月の旅行でカイロを訪問しており、わたしは昔の隣人ナディアとフーダ、彼女たちの母親のギンディ夫人を訪ねた。彼女たちは、わたしたちが住んでいたアジズ・オスマーン通り一番地のアパートの二階(わたしたちのフロアより三階下)に長年住んでいた。わたしたちの住んでいた二十号室は今も空家になっており、売りに出ているということだった。買い戻してはどうかという彼らの勧めに、わたしはちょっと考えてみたが、四十年近く前にわたしたちが引き払った家をいままら買い戻したいという気持ちにはまったく湧いてこなかった。この話題が出たすぐ後、ナディアとフーダが、わたしに会いたいという人物が台所で待っているが、昼食をはじめの前に彼に会ってみるかと尋ねた。暗色のローブにターバンをつけて正装した小柄で屈強な上エジプトの農民が部屋に入ってきた。こちらが、おまえがずっと会えるのを待っていたエドワードだよ、と二人の女に告げられて、男は後ずさりし、「いいや、

この偶然の出会いにより、わたしは本書(わたしが生まれた一九三五年から博士課程を修了した一九六二年までを中心に、あの時代の生の体験を可能なかぎり掘り起こしたつもりだ)が、あの中東動乱の時代についての非公式で個人的な記録としても価値があるということに、これまで以上に確信を持つようになった。わたしは自分の人生について語りながら、その背景に第二次世界大戦、パレスチナの喪失、イスラエルの誕生、エジプト王政の倒壊、ナーセル時代、一九六七年の第三次中東戦争、パレスチナ解放運動の始まり、レバノン内戦、オスロー和平合意などといった歴史が横たわっていることに気がついた。これらの事件はこのメモワールではさりげなくほめかされているにすぎないが、それらについての短い言及はそここに見え隠れしている。

書き手としてもっと興味を感じたのは、遠い昔に起こったというだけでなく、異なる言語環境で展開した体験を自分がつねに翻訳しようとしているという意識であった。人は誰も一つの言語環境に生きている。したがって、誰しもその言語の中でのことを体験し、吸収し、回想する。わたしの人生の基本的な分裂は、自分の生まれた土地の言語であるアラビア語と、わたしが教育を受け学者や教師としての表現手段としている英語という二つの言語のあいだの

エドワード・W・サイード

遠い場所の記憶 自伝

中野真紀子訳

みすず書房

